

令和元年6月17日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2018

課題番号：25381251

研究課題名（和文）国語科書写における用筆の分析をもとにした適切な書法の確立の研究

研究課題名（英文）Research on establishment of appropriate writing system based on analysis of writing brush in Japanese language penmanship

研究代表者

衣川 彰人（Kinukawa, Akihito）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80293728

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：漢字の点画を書く際の意識は、同じ点画でも硬筆と毛筆では捉え方が異なる。こうした意識は、点画の進行方向や形状が影響して差異が生まれている。

点画を書く際に見られる不具合は、個人の書き癖により起こるものではない。各点画の形姿などの特質と関係して、点画ごとに発生する現象に傾向性が見られる。そして、毛筆の用筆では、始筆部での用筆の重要性が確認された。始筆部での用筆上の問題が、その後の運筆に大きく影響する。特に送筆部を書いている際に、不具合が発生しやすい。こうした不具合の発生率は、点画を書く際に筆記用具を動かす方向と筆圧の変化の大小が関係していることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

漢字の基本点画を書く際の「書きやすさ」や「書きにくさ」といった意識は、どこから起こるのかを明らかにするとともに、実際に毛筆で書く際には、何が影響して適正・不適正な書き振りとなるのかについて探った。

小学校での国語科書写における、点画の書き方の指導の際に、本研究にて明らかになった問題点を踏まえた上で、点画への深い理解と筆使いについて指導を行うことにより、より適正な用筆法を効果的に学習することが出来るようにすることが可能となる。

研究成果の概要（英文）：When a person writes dots or lines in Kanji, feeling differed between pen and writing brush even about the same dots or lines. A direction and the shape of dots and lines in Kanji influence it, and make the difference.

The malfunction to be seen when a person write dots and lines in Kanji does not happen by a personal habit. The specific matters related to the form of each dot or line were observed. And, the importance of the brush strokes in the part of the beginning was confirmed. The problem in the brush strokes in the part of the beginning greatly influences the later strokes. It was revealed that direction to move writing utensils to when a person wrote dots and lines in Kanji and the difference of the change of the pressure of the pen was related to the incidence of such malfunction.

研究分野：書写書道教育

キーワード：書写 楷書 基本点画 用筆法

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

国語科書写における学習の目標の一つとして、日常生活において、「正しく整えられた文字を効率よく書くことができる能力を身につける」ことがあげられる。この目標を達成するためには、書きあがった文字の美しさなどの造形的な良し悪しを問題とするのではなく、文字を書いている過程における書字動作について意識をもって学ぶことにより、適正な用筆法(筆使い)を習得することが大切である。毛筆での指導と硬筆の指導を関連させて行う上で、毛筆での用筆法を基礎として、その用筆法を硬筆に発展させるという流れで学習が進められる。そのため、文字を書くための基本的な用筆法(筆使い)について、毛筆によって正しく習得することが有効であると考えられている。

そうした毛筆の学習や指導についての研究は、現在、筆記具の持ち方や筆写の際の筆圧を分析するという研究が進められているが、毛筆の動きに焦点を当て、その動きと筆写された線や用筆法の関連性について導き出すような研究は行われていない。そこで、横画・縦画などの基本点画を書く際の筆使いの分解写真や動画を撮影することにより、その動きを詳細に分析し、文字を書くための適切な用筆法(筆使い)について理解を深めていくための研究が必要と考え、今までは、学習者が個々に感覚的に捉えた主観的な観点に頼っていた筆の動きについて、分解写真や、動画を用い視覚的にとらえて分析することによって、より客観的に用筆法について見直すことにした。

### 2. 研究の目的

現在の国語科書写においては、文字を構成する「縦画・横画・左払い・右払い・右上払い・曲がり・そり・折れ」といった基本点画の用筆法(筆使い)について、筆の穂先の動きに注目しながら学習させるように指導が行われている。しかし、その用筆法(筆使い)の捉え方は、科学的に分析された結果に基づくものではなく、今までの先達らの経験上から得られた観念から導き出された概念的な捉え方による用法に頼っているものである。そのため、より適切な用筆法(筆使い)やその指導方法について考えるためには、今までの、概念的な捉え方ではなく、より明解な捉え方をするためにも、それぞれの点画についてより科学的に分析を加える必要がある。小学校における、国語科書写の指導においては、毛筆と関連させて、硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫することが求められる。こうした、書写指導を行うためには、基本点画への理解が重要となる。そこで、まず、学習者が点画についてどのような書字意識をもっているかを知らうえで、指導の在り方について工夫をしていくことが必要である。そこで、国語科書写の毛筆指導における、用筆法(筆使い)について、筆の動きに焦点を絞った分解写真や動画を撮影し、その動きの細部を詳細に分析することによって、筆の動きと線の形成される過程の関係を解明することにより、より適切な用筆法(筆使い)について探り、そこから得られた結果をもとに、用筆上の傾向や問題点を明らかにして、適正な書法や有効的な用筆指導の方法について探ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

今回の調査では、基本点画を書く際の運筆を動画撮影するとともに、「用筆に関する調査アンケート」を実施した。運筆の調査は、楷書の基本点画の9種(横画・縦画・転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり)をそれぞれ半紙に書いてもらい、その際の穂先の動きをビデオで撮影し動画サンプルとした。また、動画撮影に協力してもらった者に、書字や用筆に関する次の4項目について、選択式によるものに自由記述を加えた形式で回答してもらった。

- ① 書字や日常生活における利き手
- ② 基本点画についての意識
- ③ 毛筆・硬筆・その他の筆記用具の使用
- ④ 縦書きと横書きの使い分けとその割合

これらの結果と、点画を書く際の運筆の様子を撮影した動画と照らし合わせながら、点画の書き方の傾向とその有効な指導法の開発に生かすための資料作成と分析を行った。

### 4. 研究成果

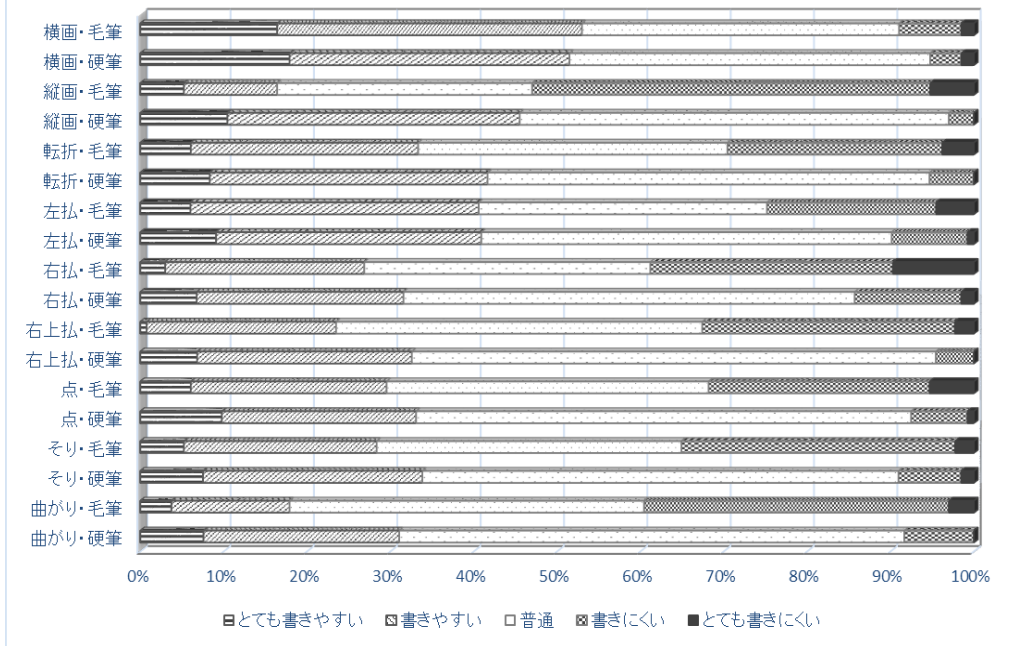
本研究は、愛知教育大学において、国語(書写を中心とする)の免許取得のために開講している「書道演習Ⅰ~Ⅳ」を履修する学生134人から協力を得て、用筆に関する調査を行い、基本点画に関する資料(アンケート結果・動画サンプル等)を収集したものを分析しながら、適正な用筆について研究を進めた。その結果、以下のような点が明らかになった。

#### (1) 基本点画に関する意識

##### ① 硬筆と毛筆での書字意識

9種の基本点画を書く際の意識は、大方、硬筆より毛筆の方が書きにくいという意識が持たれている。しかし、そうした中でも、「横画」のように、毛筆と硬筆で書きやすさや書きにくさといった意識での差がないものがある一方で、「縦画」のように、毛筆では書きにくさを感じるが硬筆では書きやすさを感じている者が多くなるといった具合に、毛筆と硬筆の間で書字意識の捉え方が大きく異なるものもある。それぞれの点画における毛筆と硬筆での捉え方は、次のグラフに示したように、同じ点画であっても、書字の際の意識が毛筆と硬筆で近いものもあれば、かけ離れたものや、中には、正反対になるようなものもある。そうした差異が生じる要因は、筆記用具の違いと書く文字の大きさの違いから書字状況が異なる点が影響していると考え

## 基本点画(毛筆・硬筆)



られる。そのため、毛筆にて学んだ点画の書き方を、そのまま単純に硬筆での用筆へとつなげるような指導だけではなく、毛筆での用筆法として学んだ方向や筆圧の変化に加えて、鉛筆などの筆記用具をスムーズに操るためのより細かな指の動きと腕の動きを上手く連動させるための方法や、筆記用具の違いから生じる提腕法や懸腕法といった執筆法の違いによる問題も含め、書字状況に即した指導法の開発が必要であることが改めて浮き彫りになった。

### ②毛筆にて基本点画を書く際の意識と用筆

点画への「書きやすい」「書きにくい」という意識が、実際に毛筆で書く際の筆使いに影響を与えているかについて、穂先の移動に焦点をあてて分析すると、書きやすさへの意識と、穂先の移動の適正、適正外については、両者の間に関係性は発見できなかった。そのため、「書きやすさ」＝「適正な穂先の移動」といった具合に、単純に結びつけて考えることはできず、毛筆で点画を書く際の意識と、実際に書く際の用筆との間には直接的な相関性はないことが分かった。

そこで、点画を書く際の意識の発生は何がもととなっているか、それぞれの点画を書く際に思うことや、気を付けていることについて自由記述してもらった意見を分析すると、

- ア、運筆にともなう筆圧の変化が少ないもの（横画・縦画・転折）
- イ、運筆にともなう筆圧の変化が大きいもの（左払い・右払い・右上払い）
- ウ、運筆にともない筆圧と穂先の移動が複雑に変化するもの（そり・曲がり）
- エ、短い運筆の中で筆圧が大きく変化するもの（点）

の4つに分類することが出来る。

点画を書く際に意識を向ける箇所は、点画の形質に応じて違いがある。横画と縦画のような、運筆の方向が右や下といった一方向へ書き進められるもので、筆圧の変化もそれほど大きくないものにおいては、始筆や送筆、終筆および点画の全体など、広い視点で捉えられている。そして、それぞれの部分において、形状や筆圧、用筆などさまざまところに目を向けることが出来ているようである。しかし、転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がりといった、運筆中に方向とともに筆圧の変化も伴いながら書き進められる点画においては、そうした複雑な変化の結果形作られた形状への視線が優先して働くようである。殊に、転折・そり・曲がりにおいては、方向を変化させる送筆部分への意識が多く、左払い・右上払いでは、点画全体の形と筆先をまとめながら払っていく終筆部分への意識が多く見られる。右払いでも同様の傾向が見られるが、中でも、送筆から一度止まった後の、払っていく終筆部分への意識が特に多くなるようである。また、点は、短い運筆で小さく書かれるため、始筆・送筆・終筆の境目を意識しづらいこともあってか、それぞれを区別せず、点画全体の形に意識が向けられる傾向が見られる。このように、転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がりといった多くの点画においては、見た目の形姿への視線が先に立つことから、形状以外の要素へはあまり意識が向けられておらず、そういった偏った観点の中で、書きやすさや書きにくさが判断されてしまっていることが分かった。

今後、正しい点画への理解を深めるための指導を行うためには、今回の研究にて明らかになった、それぞれの点画の意識に影響している要素を踏まえた上で、あらゆる観点を通して総合的に判断出来るようにするための指導方法を開発する必要がある。

## (2) 毛筆の用筆における問題と傾向

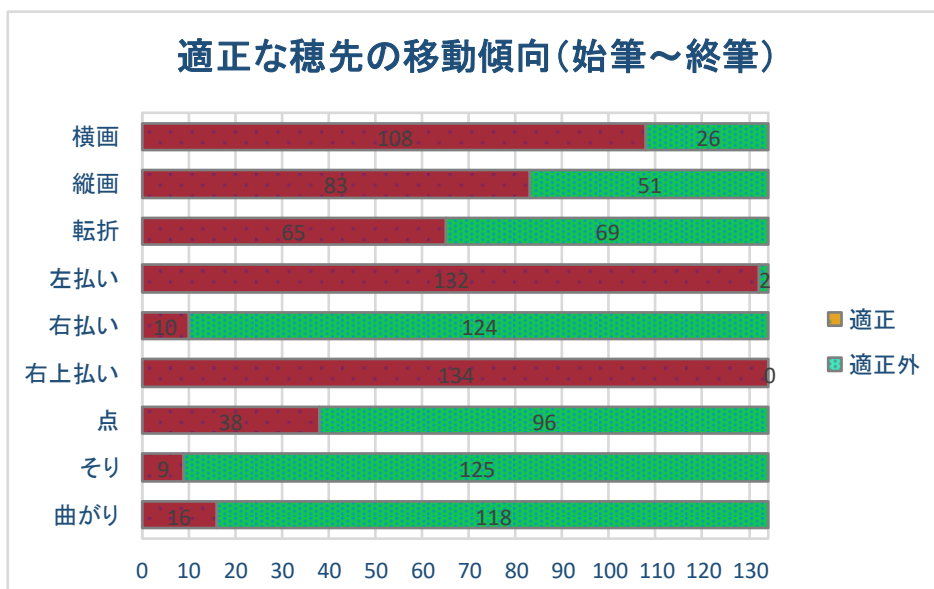
### ①各点画の始筆部における問題とその傾向性

9種の基本点画の用筆上の問題について分析してみると、進行方向をもとに、水平方向・垂直方向・斜め方向の書き進められる方向に関連して、始筆部の用筆上の問題の生じやすさに違いが見られた。

水平方向では、筆を右へと引っ張る動作から穂先の筆圧が抜けてしまう現象が見られ、垂直方向では、十分に加えられた筆圧が、筆を下へと動かす際にいろいろな抜け方につながり、穂先だけではなく、右下へと押さえた部分にコブ状の突起を生じたり、穂がねじれをおこしたりと、あらゆる現象を引き起こすことになっていた。また、斜め方向では、進行方向へと運筆する際に曲線的な用筆が含まれることや、日常生活ではあまりない動作による運筆があるなど、それぞれの点画がもつ特有な問題からの影響を受けて、始筆における用筆傾向の発生に違いが見られることが分かった。このように、始筆における用筆上のさまざまな問題は、書字者一人ひとりの書き癖のようにして、一部の個人に偏って発生するようなものではなく、点画ごとの特質と関連して、誰もが引き起こしてしまうものであることが分かった。

### ②始筆部での傾向がその後の用筆に与える影響

134人が書いた9種の点画の用筆1206例について、どのような筆使いがされているか、動画と書かれた半紙の用筆資料を分析するにあたり、紙に入筆して(始筆)から最後に紙から筆が離れる(終筆)まで、適正に書き進めるために最も重要である穂先の移動についてみてみると、下のグラフのようであった。これをみると、基本点画により、始筆から終筆に至るまでの穂先の移動が適正に出来ているものと適正外であるものの分布に大きな差があることが分かる。



こうした傾向は、点画への「書きやすい」とか「書きにくい」といった点画への意識に連動して、穂先の移動が適正に行われる傾向が強くなったり弱くなったりするようなものではない。右上払いでは134人のすべて(100%)が、左払いにおいても132人(約99%)が適正な穂先の移動で書くことが出来ている。そして、横画においては108人(約80%)、縦画では83人(約62%)とどちらも、6割以上のものが適正な移動が出来ている。しかし、転折では65人(約49%)と半数を切るようになり、点では、適正な穂先の移動が出来ているものは38人(約28%)と3割に満たない状況がみられる。また、曲がりでは16人(約12%)、右払い10人、そり9人(どちらも約7%)と適正な穂先の移動は少なくなっていく。

このように、始筆から終筆まで書き進める途中で方向の変化を伴うかどうか、このような差異に影響していることが分かった。

また、この中から、横画と縦画、そして横と縦の移動が組み合わさった転折について分析することにより、水平方向と垂直方向へ穂先を移動させる際に見られる傾向や、問題点について探ってみると、どの画も始筆が適正であるものからは穂先の移動も適正に行われる傾向が強く、不具合を起こしにくい。これに対して、始筆での入筆角度や筆圧の加え方などに不具合がある場合は、運筆の際に何らかの問題を起こしやすかった。これは、横から折れて縦方向へと書き進める折れの部分での用筆でも同じであり、一旦止まった時点で、穂の態勢を適正に整えることが出来なければ、その後の穂先の移動に問題を生じてしまうことが多くなる。このように、始筆部の状態が送筆へと及ぼす影響はとて大きいものがある。

### ③点画への意識と用筆への影響

用筆に影響を及ぼす点画への意識は、各点画の形質から抱かれる傾向が強いようである。横画と縦画のような運筆の方向が一定で、筆圧の変化もそれほど大きくないものにおいては、始筆や送筆、終筆および点画の全体など、広い視点で捉えられ、形状や筆圧、用筆などさまざま

なところに目が向けられているようである。しかし、転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がりといった、運筆中に方向とともに筆圧の変化も伴いながら書き進められる点画においては、そうした複雑な変化の結果形作られた形状への視線が優先して働き、運筆中の穂先の移動、終筆の処理などの細かな点まで意識が向けられない傾向がある。こうした点へ目を向けることは、用筆についての理解を深めるとともに、適正な用筆法の習得のためにも重要である。

今後は、今回の研究で明らかになった点画別の傾向や、始筆・送筆・終筆のそれぞれの地点における運筆上の問題点を踏まえた上で、用筆指導の効果的な方法について研究を進めていきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

① 衣川彰人、国語科書写における毛筆での用筆に関する一考察——横画・縦画・転折における用筆の分析を中心として——、愛知教育大学大学院国語研究、査読無、27号、2019、12-28、[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=7098&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7098&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

② 衣川彰人、書字に関する調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察(2)、愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)、査読有、68号、2019、35-48、

[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=7156&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7156&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

③ 衣川彰人、国語科書写における毛筆での書字に関する一考察——始筆の傾向と用筆との関連性を中心として——、愛知教育大学大学院国語研究、査読無、26号、2018、2-24、

[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=6448&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6448&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

④ 衣川彰人、書字に関する調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察(1)、愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)、査読有、67(1)号、2018、33-46、

[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=6426&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6426&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。